



「正しいハイエク」

日本では同義語だと思われがちな「自由」と「民主」は本来、対立する概念。前者はボーダーレス。後者はボーダーコンシヤス。

富裕層のみが馬車に乗ってコモ

が生んだ格安航空会社で、誰もが自由に旅券の提示無しで域内を移動可能となったのが前者。

後者は、テロワール＝生育環境・産地特性が齎す「土の香り」漂う郷土料理、更には言語や文化習慣、伝統という金銭に換算出来ない価値を重んじる、それぞれの地域に根ざした歴史の智慧です。本来は相容れない両者の壮大なる止揚をEUは試みるも、「コロナ」と「ウクライナ」に直面する昨今、米国と同じ「分断社会」が顕在化しています。

「3・11」から1年後の2012年3月2日、「公正」とは何かを質疑した衆議院予算委員会での発言を再録します。「完璧な」公平や平等というのは、これは全知全能の神とて難しく、フェアであることが大事。即ち切磋琢磨の『正しいハイエク』と経世済民、富国強兵ならぬ富国裕民の『新しいケインズ』の統合が必要かと思っております。

湖の畔で恋に落ちる余裕を持ち得たヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの時代と異なり、アイランドのライアンエアに象徴される欧州連合EUの「規制緩和」

それは「私」と「公」の関係と似ています。「私」という文字の「ノ木偏」は禾穀類を、左側の「ム」は肘鉄を現す象形文字です。精魂込めて育てた穀物を、夜陰

に乗じて他集落の人間が盗みに来たら、「これは私の物だぞ」と追いつ返す。それが原義なのです。では、「人」と「ム」を組み合わせた「公」は？ 人様に迷惑を掛けない限り、分け隔て無く誰もが寛げる時空が「公園」であるように股下の「ム」を「人」の体温で温め、公の中の1人の人間に戻してあげる意味合いです。

日本では公共事業を連想して「官」と「公」は同義と思われるがち。「稼ぐ自治体」を錦の御旗に、維持管理費を捻出すべく公園面積を狭めて商業施設を誘致する事例が増加。税金というお代を先に頂戴する行政は、「民」では採算が合わない「自然環境・社会基盤・制度資本」を創り・護り・救う為に存在するにも拘らず。

信州・長野県知事時代の2004年、僕の依頼に応じて長尺の答申「未来への提言」コモンズからはじまる、信州ルネッサンス革命」を執筆下さった宇沢弘文翁。

ポール・サミュエルソン流の新古典派とケインズ派を統合する理論を構築し、シカゴ大学で教鞭を執った畏兄は、リチャード・ニクソン政権が画策した軍事クーデタ

1で1973年9月11日、世界初の「自由選挙」で誕生した社会主義政権サルヴァドル・アジェンデ人民連合政権が崩壊するや祝杯を挙げたミルトン・フリードマンら「シカゴ学派」と絶縁。

『自動車の社会的費用』を翌年に上梓。水俣病や成田空港問題に取り組み、1983年に文化功労者に選ばれた畏兄は、昭和天皇に『進講』の際、「ケインズが新古典派が社会的共通資本が」と上気して語り続けると話を遮られ、「君！君は経済、経済と言うが、人間の心が大事だと、そう言いたいんだね」と看破されます。

天皇制には懐疑的だった畏兄が宴席で、以前から知己だった入江相政侍従長に「なかなか魅力的な方ですね」と語ると「君、ここまで育てるのに千年は掛かったよ」と微笑しながら応じた逸話。富国強兵を唱和する時代にこそ、偏狭な弱肉強食とは異なりフリードリヒ・アウグスト・フォン・ハイエクの深意であるう、切磋琢磨する公正な「正しいハイエク」と旧来型公共事業を凌駕する経世済民の「新しいケインズ」の止揚こそが肝要と改めて愚考します。

★次号(2月号)の発行日は一月27日(金)です。